

こしえるびと

つむぐストーリー vol.127

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

誰もが知るナス産地一関を目指して

花泉町花泉 佐藤 徳士さん

知人に誘われ農業の道へ

日差しがさんさんと照りつける、田園地帯にあるナス畑。佐藤徳士さんは収穫したナスを次々とコンテナに詰めしていく。

一関高専で機械制御を学んでいた徳士さん。機械系の技術職を目指したものの、志半ばの3年生で中退を選んだ。その後はさまざまな職種を経験し、職業訓練校で事務に関わる資格習得に励んだこともあった。そんなあるとき、高専時代の先輩から「農業をやってみないか」と誘われた。「始めるにしても定年を迎えてからになるだろう」と考えたが、先輩の楽しそうな様子を見ているうちに、自然と興味が湧いてきた。実家には両親がかつて米を作付けした水田がある。徳士さんが就農を決意するまでに時間はかからなかった。

上手いかわない中にある楽しさ

就農に当たって徳士さんが選んだ品目は、地元花泉地域で最も作られているナス。実家が所有している水田を利用し、1年目となる今年度は苗860本を定植、露地トンネルでの栽培に挑戦している。

実際に農業を始めた今、徳士さんの頭を悩ませているのは、天候に振り回されるなどして計画通りに管理作業が進まなかったり、経営を考える時間を確保できなかったりすること。一方、「ナスがきれいな実をつけるなど、管理が上手くできたときの喜びは大きい」と充実感も味わっている。今は定植した樹からの収穫をやり遂げることが目標。来年度以降はかん水や草刈りなどの作業の機械化や、ビニールハウスの建設などを視野にステップアップを考えている。

産地の評判を高めたい

JANAなす生産部会に所属する徳士さんは、「精力的な部会活動がとても楽しい」と笑顔を見せる。部会員同士で栽培管理について情報共有したり、他の部会員の圃場へ出向いて作業を手伝ったりと、「チーム一丸」となって生産に取り組む風土が気に入っている。部会の若手生産者グループが企画する「ナスフェス2025」では広報担当を務めた。「部会行事に積極的に参加して、もっと盛り上げていきたい」と意気込む。

徳士さんの夢は、一関地方を誰もが認知するナスの産地にすること。「品質には揺るぎない自信があるが、まだまだ産地が知られていない現状を変えていきたい」と未来を見据える。「東北有数」から「国内随一」へ。徳士さんは今日も夢に向かって歩みを進める。



PROFILE

佐藤 徳士さん (46)

Tokushi Sato

花泉町花泉

1978年花泉町花泉生まれ。一関高専を中退後、さまざまな職業を経験。ナス農家で1年間アルバイトをした後、ワンストップ相談窓口の利用からJA研修生を経て2025年就農。ナス20%。両親と3人暮らし。

